

こどもとアーティストがつくる舞台 Be A Clown! 2009

クラウンは、通化時
多彩なワザとコミカルな演技で、人々を笑顔にするアーティスト
昨年からはじまった川崎市アートセンターの《Be A Clown!》は
市内在住のこどもたちが
世界屈指のシアタークラウンに導かれて
いっしょに公演の舞台を創りあげてゆくワークショップです
取材・文 栗山静代



RONE&Gigi (ロネ&ジー) クラウン劇団「OPEN SESAME」を率いて、劇場をメインに活動をつづけるクラウン・デュオ。《主な受賞歴》02年英国クラウンズインターナショナル最優秀クラウン賞など多数。
<http://www.op-sesame.com/>

昨年の

感動のフィナーレはこう劇られた
(89歳 Be A Clown! エキサイト)

昨年の《Be A Clown!》発表公演には応募者の28名が全員参加した。小学生を中心とする大人数のケアは並大抵ではない。舞台づくりには大勢のボランティアからの温かいサポートがあった。

アートセンターが専業した舞台制作のインターン、こどもたちの保護者、社会参加を求めるリタイア世代、ロネ&ジーのファンの人たちが、さまざまな人々が裏方を貫き通して出た。多彩なクラウン・パフォーマンスを支えてくれたのは、ロネ&ジー主催スクールの生徒さんたちだ。ジャグリング、パルーンシアター、パントマイム……こどもたちは路々、やりたいものから始めるのだが、初めのころは道具を手にしたまま固まってしまった。

「さあ、大きな声を聞かせよ」

ガウンとした客席の一番後ろから、ジー先生がステージの子どもに呼びかけても、消え入るような声しか返ってこない。

「日本の子どもが一番ゴワガワですね」
海外での指導経験が豊富なロネ&ジーは

《Be A Clown!》が「Be A Clown! 2009」発表公演
10月31日(土) 13時・18時、11月1日(日) 11時
会場 川崎市アートセンター アルテリオ小劇場

09秋の気配のワークショップ初日

2009年8月24日、ワークショップ初日。それはふしぎなパフォーマンス指導だった。ランダムに巻き戻って、音楽が止んだら、目と目が合った相手とハグし合う。

「しっかリアイコンタクトを取ろうね。目が死んでいてはパトナリが見つけられないよ。ゾンビにならないで」

ロネ&ジーがリードすると、稽古もゆかいなゲームになる。アルテリオ小劇場の舞台には、小2から中3まで18名の参加者が、元気な笑顔をそそいでいた。

ワークショップは終始、舞台の上で進められてゆく。今日から11月1日の公演終了まで、みんな旅を共にする船の上だ。

「みんな今、なぜハグしたのがな〜？ やれと言われたからだよね。そう、これはやらなければならぬこと。舞台の上の役割だから、でもやる以上は、やりたいからやってみよう」

ロネ&ジーの掛けるなぞは、熱や学校ではけつして出題されない。無表情で恥ずかしそうにハグし合っていたこどもたちが、今度はうれしそうに抱き合った。

「1回目、やれと言われたからハグした。2回目は、ハグしたいからハグしたね。観てい

口をそろえる。
「表現力がないんじゃないか、抱えられている感じ」と、ロネさん。

ロネ&ジーは待った。こどもたちとアートを交換して、同じ目線になりながら。

ある日、稽古中に一人の男の子が、鼻にパルーンを突っ込んでくちくちくはじめた。

「それいいね、舞台で使おう。ロネ&ジーは手を叩いて笑った。みんなも笑った。

これをきっかけに他の子たちも、自分で考えたポーズを演技に取り入れはじめる。
「じゃあわたしは一回転して、こうよ！」
周りに合わせようとはかりしていたこどもたちが、独自の発想を競いはじめた。

そして全20回3か月におよぶワークショップの日々は賑やかに過ぎ、11月8日の公演当日を迎えた。

ストーリーは、クラウン学校の生徒たちが卒業するまでの物語。ジーさんが一人一人の個性を生かしながら組み立てた台本である。

愛らしい28人による精一杯のクラウン・パフォーマンス。アーティストたちの見事なコマディアクション。関わったすべての人が、限られた期間に尽くした力の結晶だ。

エンディングでは、こどもたち全員が舞台

た人はどちらが幸せな気持ちになるかな？」

幸せな気持ちでやると、それを観る人も幸せになるのか……こどもたちは一歩ずつ《Be A Clown!》のホントの意味へ近づいてゆく。

二人一組になって行う鏡のパフォーマンスは、音楽に乗って一方が自由に体を動かし、一方はそれを鏡のように真似る。1回目はふつうの稽古。2回目はどちらが鏡の役か、ロネ&ジーが当てるゲームだ。二人の講師に見抜かれないよう、懸命に呼吸を合わせる。

ゲームが終わると、ジー先生が聞いた。1回目と2回日の演技はどう違ったと思う？

「2回目(ゲームの時)は、鏡になっていた相手と目が合ったようにやりました」

一人の子がそう答えると、先生はうなずく。「伝えた時は、相手がそれを受け取りやすいように、相手のキモチになることね」

ジー先生のことばは、わたしたち大人の胸にも沁み込んでくる。こどもたちはスポンジになって、体いっぱいそれを吸い込む。

コミュニケーションの取り方、人を幸せにする方法……舞台づくりで、そして人生で一番たいせつなことを、楽しみながら体験したこどもたち。こうして《Be A Clown! 2009》は、明るい風に乗って船出した。

に飛び出して軽快なダンスを繰り出けるのが、お気に入りの英語のフレーズを、みんなで歌い出したのだ。客席の一番後ろまで響く声……
「歌うという扱いは少しもらえていなかったんですよ」と、ロネさんは驚く。「ここから、自分たちで舞台を創っているという、自発的な意志が芽生えていたのだと思います」

少し軽んじちゃったけど、手からボールがこぼれ落ちたけど、みんなはじけた。バラバラではなく、28の個性がハートモニを奏でながら、はじけた！



《Be A Clown! 2009》 24
ロネ&ジー(昨年)はこどもたちがベストを尽くし、感動のフィナーレを演じました。今年も可能な限りこどもたちの成長を導き、いっせーうー一人の個性がフォーカスされる舞台を創りたいと考えています

PRESENT

川崎市アートセンターより読者プレゼント

この発表公演に関する方々へ贈る4冊のプレゼント
応募要項は本誌別添付シートをご覧ください